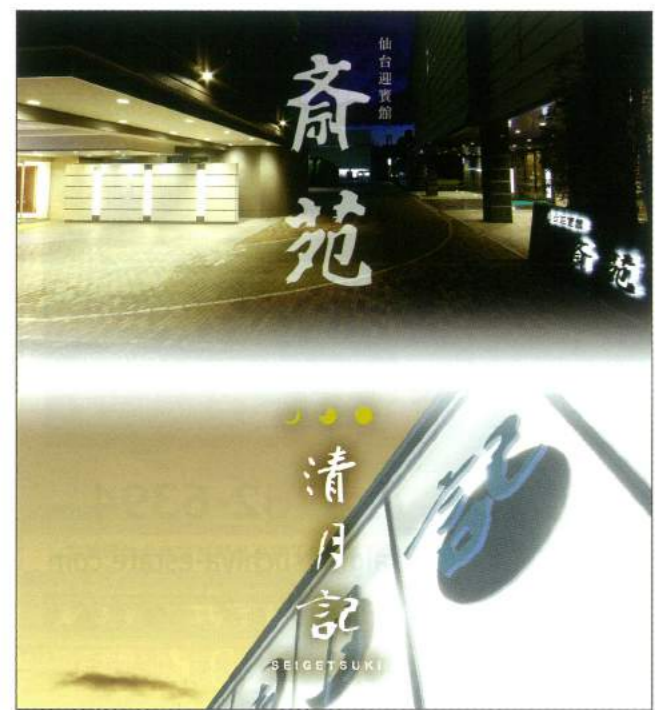


仙台市中心部の76室のホテル、「社のホテル仙台」を営む佐藤真紀さん。子育てとビジネスをこなしながらの奮闘や経営者としての考え、自身のホテルづくりなどをお聞きしました。



佐藤 真紀さん さとう・まき

●1959年7月11日、父・菅原千代男氏と母・節子さんの2人兄弟の長女として、宮城県大崎市鳴子町川渡(鳴子温泉、旧鳴子町)で生まれる。59歳。父は、菅基建設の2代目として建設業を営んでいた。創業者は菅原基之助氏。現在は、兄の菅原伸介氏が同社を引き継いでいる。●旧古川女子校(現古川黎明高等学校)から、成城大学文芸学部芸術学科卒業。日本鋼管東北支社で8年間、経理、総務、営業を担当。同社退職後、菅基建設で経理、総務などを担当。●平成9年、結婚、長男をもうける。有限会社八千代を設立、平成10年、「社のホテル仙台」をオープン、今年で21年目。●趣味は旅行、書道とゴスペルを歌うこと。旅行は、「手配も含めて、すべて自分の力で一人で目的地まで行くのがマイブーム」。ゴスペルは友人の誘いで1年前から始めた。●仙台商工会議所会員、経済同友会会員。



していききました。コンセントの色一つから食器一つに至るまで、色や材質、質感など自分で決めていきました。ホテル建設中も、現場担当者との毎週行なう定例会後は食事などを通して、連帯感を大切にしました。オープン後も、NYなどに行きホテルを視察しています。

菅原 建物を手を抜くと、心がこもらなくなり、顔がまったく変わりますね。

佐藤 そうですね。まったく空気感が変わってしまいました。

菅原 スタッフなどは、佐藤 オープン時から苦業を共にしたスタッフが現在支配人となり、15〜16人です。サービス業はハードが2割、ソフトが8割だと思っております。できあがった建物に心を入れていくのがスタッフの

仕事です。彼らがお客さまのために柔軟な発想で試行錯誤していきけるよう、最後の責任をとる覚悟を持つようになっています。

菅原 ホテルというのは、人の命を預かっている、大変な仕事だと思っています。

佐藤 いかにして、何事もなくお過ごしでしたか、そこに心をくだいています。

菅原 IT時代になり、価格競争も激しくなっています。

佐藤 ネット上で価格競争と価格破壊の時代になりました。当日に予約をする半額などというホテルさんが増える中で、早い時期に杜のホテルを選んで下さったお客さまの心を大切にするためには、



ホテルのオープニングレセプション当日。父、兄と並び胸に大きな花をつけられ緊張

私はむしろ逆でなければならぬと思っています。

菅原 結婚されお子さまを育てながら家事もこなされています。

佐藤 実家や自分の家族スタッフの支援や理解がなければここまで来られません。子どもが小さい頃は母には週に3日鳴子から来ても



設計から施工まで力を合わせて下さった方たちと

らいました。周囲に迷惑をかけながら仕事をすることが正直苦しかったです。

菅原 今後ご活躍を期待しております。

夫は全く違う仕事をしており、ですので、理解はしてくれませんが協力を求めることはできません。夫婦それぞれが自分の足で立つことが基本だと思っています。

菅原 これからの女性のためにメッセージを。

佐藤 20年間を一言で表すと全てに感謝です。一人では乗り越えられなかった事も、周囲を巻き込んで、頼って時には頼られ、できない自分も丸ごと受け入れてきたように思います。

### 「周りに頼って、そして頼られること」

菅原 今年で東日本大震災から8年目になりました。当時は大変だったでしょうね。

佐藤 正直、これは自己破産だと思いました。地震で給排水設備などが壊れ、お湯も出せず暖房も稼働しない、ホテルにとっては致命的で、不良品になってしまったんです。でも何とか、皆さんのおかげで再開出来たときは本当にほっとしました。

菅原 いくらリスクを避けながら経営していたとしても、とても予測できないことが起きるのだ、ということを実感しました。

佐藤 あの時ほど、経営の難しさを感じたことはありませんでした。

菅原 とところでホテル経営のきっかけは何だったのですか。



OL時代 自宅にて母と



大学ゼミ仲間と敦煌、鳴砂山で(右から一人目)

か。

佐藤 日本鋼管東北支社をやめた後、父の経営する菅基建設で経理や総務の仕事に携わっていましたが、父から突然、仙台でホテルをやる、建物の設計事務所も決めたとされたのです。やるとすれば私しかないだろうと思いましたが、そのときは思わず絶句しました。

父は何かを決めるのに家族に相談ということは一切なく、結論ありきの人でした。ですから、父が言葉にしたと

同時に私の中の覚悟が固まりました。

菅原 何か、私と似ているかもしれない。しかし、経験もない中でホテル経営をするのは大変だったでしょうね。

佐藤 私が38歳の時でした。サービス業は経験もなく初めてだったので、最初はとまどいました。父からは、会社を作ってこいといわれ、会社設立の本を読み、勉強して、銀行や司法書士との相談、スタッフ集め、名刺作りも一人で行いました。会社名の八千代は、国歌の「千代に八千代」と父の千代男を合わせて、とても縁起が良いからと、母と一緒に決めたのです。



清月記総本社で

1998年に、「社のホテル仙台」をオープン、今年で21年目になります。建設地

菅原 とても暖かい雰囲気のホテルですね。

佐藤 当時私の中のビジネスホテルのイメージは、白い壁にベッドの無機質で寝るだけの空間でしたが、私はせっかく素人が作るのだから、空気を大切に、自分が心地良いと感じる空間創りを目指しました。そして一つずつ、自分の持つイメージを具体化しました。

そのために、女性の設計者としてみたいホテルを5〜6カ所視察しました。お互い同じものを見て「これ良いね」という、感覚のすり合わせを

は、元々創業者が住んでいた所で、菅基建設の仙台出張所があった場所です。

「二つずつ、自分の持つイメージを具体化」